

51

くまのじんじゃ たねがしま
熊野神社（種子島） 願成就祭り

〔別 名〕 熊野神社新嘗祭

〔伝 承 地〕 熊毛郡中種子町坂井熊野神社

〔実施時期〕 毎年十一月二三日

〔実施場所〕 熊毛郡中種子町坂井熊野

〔伝承組織〕 熊野神社氏子

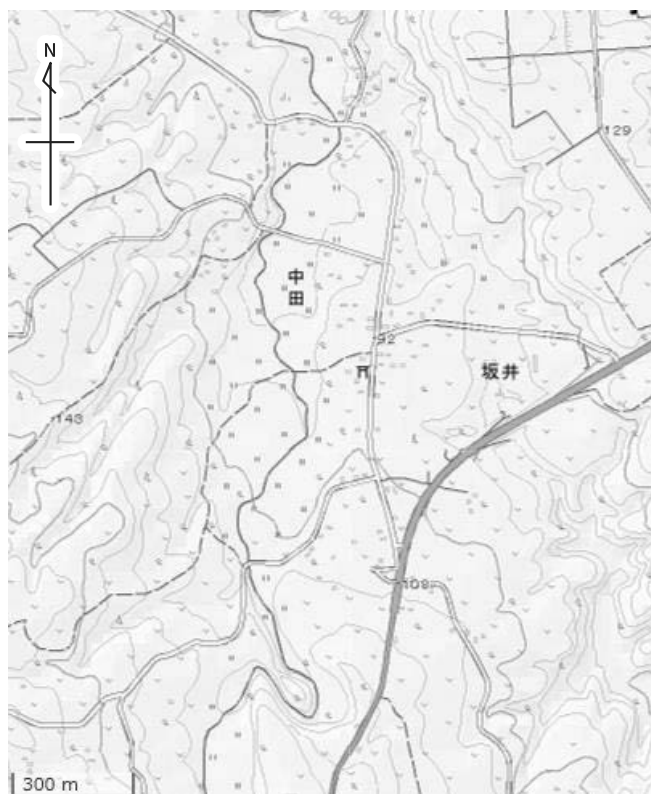
〔名称〕

新嘗祭（にいなめさい）を正式名称とするが、同様の祭礼は種子島では一般には「願成就（地元ではガンジョウジと発音）」または「秋祭り」と称し、島内全域で一〇月から一月にかけて行われる収穫感謝祭である（本来は旧暦九月九日）。後述するが願成就は各種の踊りが奉納される、種子島の芸能の温床の役割を果たしてきた祭礼である。

〔実施場所〕

熊野神社は中種子町の南東部、かつて種子島随一の景勝地とうたわれた熊野浦を臨む小高い権現山（熊野山とも）の中腹に鎮座する。南方向を向く本殿からは手前に熊野漁港、その先に緩い弧をなす白砂を遠望することができる。西方向には広々した農地（放置された農地や養殖施設などが見える。）の中に熊野集落と新町集落の人家が見えるが、もとは満潮時に湖水と化す風光明媚の干潟であった。昭和二十七年から国営の干拓工事が着手され、昭和三四年に完成して現在の姿になった。

普通に熊野という場合、北から熊野・新町・塩屋の三つの集落をまとめていう。かつての坂井村に属し、現在は大字坂井に含まれる。



熊野神社周辺



寺踊り

『南界郷土誌』（平成元年）によると（南界は小学校の名前）、干潟の北側に位置する熊野集落が古くからの集落で、塩屋集落は現在の漁港近くの住民が明治中頃に独立したものである。権現山の裾には大正期より漁業者数戸が居住していたが、前述の戦後の干拓後、県道（七五号線）沿いへの移転が進んで現在の新町集落（県道に沿った鳥居のあたり）として独立した。前掲『南界郷土誌』によると、天保九（一八三八）年、熊野神社北側の山中に種子島家二三代の当主夫人（松寿院）が小別荘松濤庵（しょうとうあん）を建て、しばしば熊野神社参詣を兼ねて滞在したと言う。松寿院は当主没後、島内の殖産振興を推進した人として尊崇された。かつての干潟を松濤湾ともいうのはこの別荘にちなんだ呼称である。

【実施時期】

毎年新暦一月二三日の午前一時より祭典開始、そのあと踊りの奉納があり、終わると拝殿にて直会が行われる。

【伝承組織】

後述するように熊野神社は、室町時代中期に種子島の領主種子島幡時によって紀州熊野権現大社を勧請して創建されたもので、種子島全域を氏子とした。近代になると現大字に相当する旧坂井村域の住民が祭祀を支える形となつて現在に至っているが、実際の主体は地元熊野の三つの集落である。坂井全体の鎮守社は本村（ほんむら）にある坂井神社で、坂井神社でも願成就は行われる。

【由来・伝承】

熊野神社は『中種子町郷土誌』（昭和四六年）によると、享徳元年（一四五二）、島主種子島幡時によって紀州熊野権現を勧請して創建された。附近を権現山といい当地を熊野浦というのはそれ以来の呼称だが、往昔より神祠があつて靈驗顯著だったとも言われる。熊野神社の勧請地に選定されたのはそうした背景があつたためと思

われるものの、そのあたりの伝承は失われている。

紀州から勧請する際、幡時はご神体として小石を箱に入れて運びこみ、その小石は年々成長して大きくなり小石を生んだという『三国名勝図会』の記述を『中種子町郷土誌』は引用している。ご神体が石舂神であつたことを物語る伝承である。

勧請以来領主の崇敬は厚く、田禄の寄進や社殿の改築を行い、毎月重臣を遣わし代参させるを例とし、例祭には自ら参拝されたという。熊野山中（権現山）を神山として斧等を入れることを禁止した。そのために近代になつても照葉樹林がよく保全され、現在は「ヤッコソウ自生地」（町指定文化財）ともなっている。

祭神は伊邪那岐・伊邪那美の二神。本社を鎮護するために石祠が周辺域の八か所に祀られていると言う（一部は現存し、一部は所在を確定できない。）。いずれも荒神とされる。勧請前から存在した古い神々が熊野神社のもとに系列化されたことを思わせる。

明治二年、前述の成長する小石（ご神体）を中種子町北西の海岸集落浜津脇に遷して浜津脇熊野神社が立てられた。以後、両者は親子の關係にあるとされ、一五年に一度の新嘗祭では、浜津脇熊野神社のご神体を迎えての対面式（神幸祭）が行われる。

社格としては明治期に郷社、昭和十八年からは県社に指定された。主たる祭祀としては『中種子町郷土誌』によると、二月一七日の祈年祭、四月三日の例祭、六月一六日の中祭、十一月二三日の新嘗祭があり、特に四月三日と六月一六日の祭りには、戦後しばらくの頃まで全島からの参拝があつて大いにぎわつた。

【実施内容】

午前一時より拝殿にて関係者が参列して祭典が始まる。熊野神社神主（黒木憲昭氏）を祭主として、中種子町内の野間神社・油久神社・納官神社の各神主が参集して祭祀団を形成する。近年は以上四つの神社神主はそれぞれの例祭や大祭で、お互いに協力して祭祀を行っている。祭儀の中の奏楽で近年使用されている楽器は笙と笛

と太鼓である。

祭式は本土のそれと特に変わるところはないが、特徴はこのあと境内の一段低くなった小広場にて寺踊（男子のみによる）が奉納されることである。平成二八年の祭礼では二〇人ほどが参加した。黒っぽい（または濃紺の）着物に角帯姿、足袋で踊る。登場前に御神酒をいただき、二列で入場する。

二列の右側が楽で、先頭の大太鼓（二人）のみが上衣がカラフルな踊衣装に白い股引・灰色脚絆・黒足袋・草履・横鉢巻の姿。左手で大太鼓を持って大きくゆっくり振り回しながら右手のバチで叩く。そのあとに小太鼓二人とカネ二人が続く。小太鼓とカネは踊子と同じ着物姿で、大太鼓と同じように、左手で持って振り回しながら右手のバチで叩く。カネは小さな皿形である。これらの楽器は種子島の他の多くの踊りと共通である。

入場して楽の列の中に、外側を踊子の輪が囲む。踊子は右手に櫛の小枝を持つ。次に掲げる歌詞が二回繰り返されて歌われる。冒頭句「この宮に」が二回目で「この寺に」に変わるのみである。所要時間は一〇分ほど。終わると、拝殿にて直会が行われる。

寺踊り歌詞

この宮に（二回目では「この寺に」）

参りてみれば面白や

八つ九つの稚児が手をかく

稚児が手をかく

手をかくにも揃えて

墨のよかるうものを 揃えて

筆の白金のじく 白金のじやく

「その他」

願成就祭り

前述したように本祭礼は願成就とも言われ、全島各地でかつての村（現在の大字）を単位として、それぞれの中心神社にて行われて

きた。しかしながら近年は、人口減少によって踊りを組み立てることができず、祭儀だけの地区が増えつつある。村（大字）内の集落がそれぞれ工夫をこらした踊りを出し、年中で最もにぎわう祭礼であったが、衰微が著しい。願成就祭りは大踊りを中心とする各種の踊りを育んだ重要な祭礼なので、簡単に触れておく。日程は本来は旧暦九月九日というところが多く、以前は「九月踊り」と呼ぶ地区もあった。現在は新暦の一〇月から一月にかけて土曜日から日曜日に行われる。熊野神社の一月二三日というのは最も遅い日程である。

集落の伝統芸能

各集落はいずれも規模によって大踊り（おおおどり）・中踊り・小踊り（こおどり）と類別される複数の踊りを持ち、願成就には大踊り（最低二〇人ほど必要）をひとつは必ず奉納しなければならなかった。しかし大踊り奉納の当番に当たった集落といえども、直近に不幸があつた場合は踊りを奉納することができず、代替となる集落も決めておくのである。当番集落に不幸がなければ、二集落から大踊りが出ることになった。中踊りと小踊りも競うようにして踊られたから、願成就はすこぶる賑わう祭礼であつた。

大踊り

大踊りは三つないし四つの踊りが組になってできており、最初に踊られるのが「寺踊り」と呼ばれる祝賀的踊である。前述した「寺踊り」は大踊りが奉納されない場合の簡易の踊りといっている。熊野には三つの集落があることは前述したが、そのうち熊野集落と塩屋集落が大踊りを伝承している。新町は新しい集落なので大踊りはなく、中踊り・小踊りのみである。

平成一九年の熊野神社新嘗祭には、大踊りとしては熊野と塩屋の踊りが奉納された。熊野集落の大踊りは安城踊りといい、これは西之表市の安城が発祥地とされる。島内各地に最も広く伝承されるものの、発祥地の安城では失われている。同じ安城踊りでも地区によって中に含まれる踊りに若干の相違がある。熊野の場合は①寺踊り、

②締めれば鳴る、③堺北之町、の三曲からなり、②と③にはテンポのいい崩しが付く。小太鼓とカネがそれぞれ七〜一〇人程度で、黒っぽい着物の上から袈裟（婦人の帯）をかけ、頭に華麗な花笠をかぶる。これを中の輪にして、大太鼓一〇数人がこれを取り巻いて外輪となる。大太鼓の衣装は、上衣が江戸期のカラフルな踊り襦袢、下は白い股引と脚絆できりと引き締め、足袋に草履、頭は鉢巻、そして大太鼓を肩から下がりつけて胸に抱く。大太鼓の大将はしきりと「ヒイヨーッ」のかけ声をかけて踊りを引き締めかつリードする。全体で約三〇分から四〇分かかる。

塩屋のゲンダラ（源太郎）踊りは西之表市の住吉が発祥地とされ、晴れ着の婦人の輪が男子の輪を囲むという華やかな踊りである。これも複数の踊りの組合せでできており、塩屋の場合は①長者殿、②あれこそ、③音に聞く、④心づくし、⑤近江の国、⑥土佐から、⑦うぐいす、の七曲から成る。同じゲンダラ踊りでも、地区によって中踊りとするところもある。塩屋では大踊りとしてこれを踊っているわけである。

島内には大踊りとして他に「さんご踊り」、「しんご踊り」などがあり、それぞれ地区によつて中に含む踊りの種類が少しずつ異なっている。いずれも最初に「寺踊り」、「この寺」、「国土安穩」など祝賀性の強い踊りが踊られ、それ以外の踊りにはテンポのいい崩しが付く。歌詞はどれも中世後期風の雰囲気を持っている。

中踊り・小踊り

中踊りと小踊りには明確な区別がないが、概略でいうと道具を持って隊形変化などをするのが中踊、簡単な手踊りのみの踊りを小踊りと呼ぶ。種子島全体を見ると中踊りは弁慶踊り・ひょうたん踊り・なぎなた踊り・ヤートセー・棒踊りなど四〇種類を超える。大踊りの歌詞が中世後期風であるのに対し、中踊りと小踊りは近世歌謡風の歌詞を持つものが多い。これらはいわば大踊りの余興のような位置づけで、各集落ともにいくつかを持っている。

【参考文献】

下野敏見 二〇一二
『集』 南方新社

「南日本の民俗文化誌」 『種子島民俗芸能』

（松原 武実）



境内での寺踊り

52

湯湾釜の餅もれ

ゆわんがまもち

〔別 名〕餅もれ

〔伝 承 地〕大島郡大和村湯湾釜集落

〔実施時期〕旧暦十一月一六日

〔実施場所〕大島郡大和村湯湾釜集落内

〔伝承組織〕湯湾釜集落

〔名称〕

「湯湾釜」は集落名、「餅もれ」は「餅貰い」の方言である。

地元の人同士という場合は、地名は付さないのが一般的である。

他地域では同系統の行事を、「かねさる」、「種おろし」などと言う。

〔実施場所〕

湯湾釜集落内、ほとんど全戸の庭先で踊られる。ただし集合住宅の場合は、建物出入口付近の空き地。

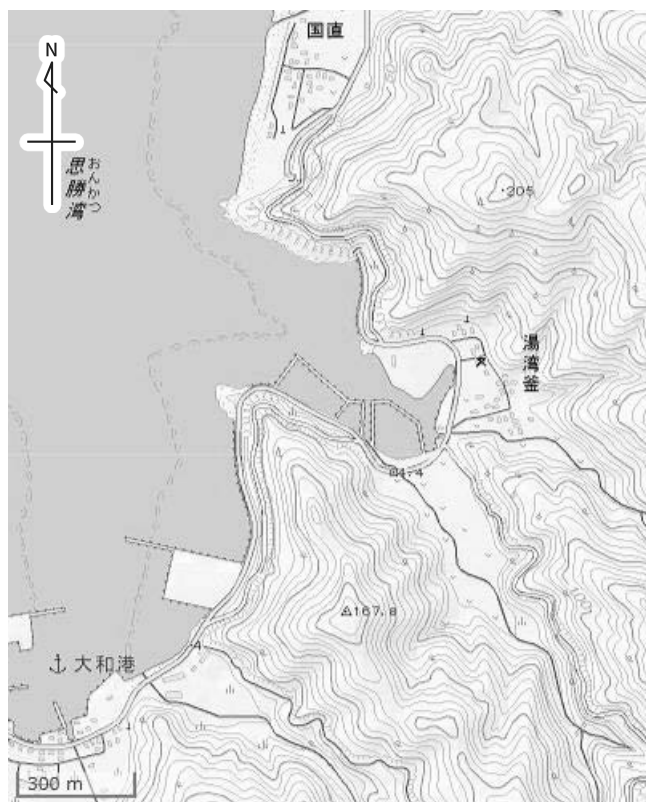
大和村は奄美大島でも東シナ海に面し、一一集落からなるが湯湾釜は、平成二七年現在、世帯数四五戸、人口一〇〇人ほどで、関東、関西はもとより、奄美市にもかなりの人が出て生活している。

〔実施時期〕

毎年、旧暦一〇月一六日。その根拠は明らかでない。

〔伝承組織〕

特別に「餅もれ」伝承ための組織はないが、湯湾釜集落（「湯湾釜集落自治会」などに当たる組織名）が主体となって実施される。



湯湾釜集落周辺



顔を隠す踊り連

「由来・伝承」

同地では、起源は三五〇年ほど前と伝えられている。ある年、集落で火事があったが、水の便が悪く大火事となった。最後は消火のために、田んぼの泥水を使うしかなかったが、この踊りは、水の大切さを忘れず、後世に伝えるために始めた、とされる。

また、この踊りの特徴として、風呂敷のような布を被って、踊り手それぞれが顔を隠すが、それは火事の時に顔を火傷し、その醜さを隠すためだと言う伝えがある。

現在は水に対する感謝のためや五穀豊穡、家内安全を願って踊られる。

他地域では、「餅もれ」という名称の通り、米の豊作感謝と祈願が主体となるが、水への感謝が主体となっていることはこの行事の一つの特徴である。奄美には、餅貫いと同様、家回りをする「八月踊り」という集団歌舞があるが、その目的も火災予防と伝える集落があり、関係するかもしれない。



写真1 三味線・太鼓

「実施内容」 参加資格

この行事に伴う作業以外は集落の居住者、また出郷者でも踊ることができ年齢を問わず参加できる。ただ過去一年内に不幸があった家の者は遠慮することがある。

集落の総出の作業

餅もれは夜に始まるが、この日欠かせない、集落中で行う作業がある。踊りの目的である、水の貴重さを感謝する気持ちを持って、

日ごろお世話になっている旧水道と呼ぶ生活用水設備を清掃、補修等をするのである。当日午前中に、集落中全世帯が参加しての作業である。

行事の準備

餅もれは、踊る人たちが各戸を訪問し、踊ったお返しにその家から餅をもらうのが基本形であるから、その準備も行事の重要な一部である。それは主に、一家の主婦が行う。

まずは踊り連に与える餅を作るのだが、その餅とは、普通「かしゃ餅」といわれているもので、餅米の粉と蒸したサツマイモとをこねあわせ、それをカシヤ（和名 クマタケラン）の葉で包んで四〇分くらい煮て出来上がる。

そのほか、今はあまり作らなくなったが、餅米粉を少なくしてサツマイモと水分を多くして柔らかく似た「ヒキヤゲ」も作っていた。これは、「由来伝承」の項で述べた、昔、大火事の時田んぼの泥を水の代わりに投げたと言う、その泥水をイメージしたもののようである。

そのほか、ビール、焼酎などの酒類、特定されない手作りの食べ物、市販の果物、菓子類、そして金一封が用意される。

踊り連の各戸訪問

踊り連の各戸訪問は、今は午後六時を過ぎた頃から始まる。踊り手、サンセン（三味線）隊は、最初集落の公民館に集まり、それから集落の伝統的な祭り処、アシヤゲと呼ばれるところから踊り始める。次から民家を次々訪ねそこで踊りを披露することになる。踊る場はほとんど、家の縁側に面しているか、雨戸をあける



写真2 次の家に移動

と踊りが見える位置になっていて、そこは自ずから踊り隊を迎え、踊りを見物する観客席となる。

一戸、数分ほどで踊りは終わり、餅、金一封等をもらって、次の家に移動する。貰った餅を入れるのは、テルと言われる奄美の伝統的な竹で編んだ背負い籠である。餅を貰った時に、区長（集落の長）が「餅もろた、もろた」と紹介し、また、金一封のときは「東西東西」と貰った旨を報告する。踊り手たちも「ヨイヤヨイヤ」と呼応する。

踊りが終わって、次の家まで移動する、いわゆる道行も重要である。この時、みんなで「道唄」を歌う。

踊り手の服装

男女とも浴衣を着ることが普通だが、男性も派手な女ものを着ることになっている。そして、男女とも顔は必ず風呂敷などの布で隠すのである。

踊りと唄と三味線伴奏

一同が家から家へ移動するいわゆる道行では、歌える人たちが「道唄」、「餅もれ唄」と言われる歌を歌う。そこでは特別な踊りはない。ただまとまって歩いていく感じであるが、三味線隊が先頭の傾向がある。

その唄は、幕末から明治にかけ、全国的に流行した「ドンドン節」の流れである。その歌詞は三〇首ほど残っていて、次の家に行くまでの間、適宜歌われる。例えば「あさとゆわんからもちもれがけやたなあたらしやありんしょうちん へえむれて



写真3 踊り

たばれ ハラドンドンジャ サマエとトサンセ（あんなに遠い湯湾釜から、餅貰いに来ました。もったいないとお思いでしょうが、私にください。以下ハヤシコトバ）」のような文句である。

そして家の敷地内に入ると、一同は室内の家の人たちに向かうようにして、踊り始める。三味線の弾きて、唄だけを歌う人たちは踊り連から少し離れ、踊りを見守るように、唄や伴奏をする。ここでの踊り唄も「ドンドン節」で奄美の代表的な踊り唄「六調」のようにアップテンポで踊る。本土系の唄でありながら、外来の唄と認識する人は少ない。

踊りはいわゆる立ったままに踊る手踊りである。特に決まった振りはないが、手を上方にあげ、招き手をするものであるが、見る人によりうまい下手は歴然としている。踊り手は総じて若い人が多いので、知っている人だけが歌う。参加者は、これらの唄が歌えるように、二週間ほど練習の期間が設けられる。



写真4 踊りを見る人たち

【意義】

「餅貰い」系統の踊りは、いくぶん形を変えながら奄美大島、喜界島、徳之島の各域に分布する。かつては、ほとんどの集落で行われていたと推定されるが、次第に少なくなり、大和村でも今行われるのは湯湾釜だけになった。

なお、「餅を貰って歩く」という形から、本来稲作儀礼の一つと位置づけられるが、湯湾釜餅もれ踊りの場合、昔、集落が火事にあって水がなく大火に至らしめたそのことを教訓とする行事だという口伝えに深く影響されている。踊る人たちが風呂敷で顔を隠すの

も、火事による火傷を隠すためだという口碑もその一つである。

実際には、奄美の餅貫い行事ではほかに顔を隠す形は見当たらないが、全国的には、秋田県の西馬音内盆踊りが有名で、かつ奄美の与論島「十五夜踊り」の中にも見られる。それらと全く無関係だと言えないであろう。

そして、この踊りに付く「ドンドン節」が本土系であることも、この行事自体が、もともと本土系である可能性を示唆していると言えよう。

【参考文献】

- ・蔵源吾 一九九八 『湯湾釜集落むちもれ唄』（プリント資料）
- ・『鹿児島大島郡大和村 湯湾釜における「餅もれ踊り」』（平成一五年一月記・平成二四年十一月一部修正 解説プリント資料）
（小川 学夫）

※ 写真は全て大和村教育委員会提供

〔別 称〕

山祭り、丑祭り（丑の日に行う時）、申祭り（申の日に行う時）

〔伝 承 地〕

長島町唐隈

〔実施時期〕

旧暦十一月の丑の日、申の日のうち、初めに来た日

〔実施場所〕

準備の場を除き、出水郡長島町唐隈内にある二つの山中の聖域

〔伝承組織〕

この祭りのためだけの組織はない

〔名称〕

「唐隈」は集落名、「山ン神」は「山の神」の意味。地元では「山ン神」で通じるが、周辺にも同系統の祭りがあるので、対外的に地名を付して言われる。他に年によって実施日が異なるが、丑の日に行う時は「丑祭り」、申の日に行う時は「申祭り」とも言われる。

〔実施場所〕

祭り自体は唐隈の山中にある二か所の祭所で行われる。はじめは十五社神社近くの雑木林の中。そこでの祭りの後、同集落の「朱の鼻どん」と呼ばれる字の山中に移る。準備は唐隈公民館でも行われる。

〔実施時期〕

旧暦十一月の丑の日か、申の日に行うが、十一月になって早く来た方の日柄が選ばれる。ちなみに、平成二八年は旧暦十一月六



唐隈集落周辺



神様とナンコを行う

日が申の日（新暦一二月四日）、同月一日が丑の日（新暦一二月九日）だったので、前者が選ばれた。

「伝承組織」

特にこの祭りのための組織はないが、集落を東上、東下、西上、西下の四地区に分け、この中の一地区が年輪番でこの祭りを担う。

「由来・伝承」

長島町には、約二〇か所の山の神を祭る聖所があるが、奈良朝時代から行われたという伝えがある。

山神の性格は、供え物（シトギ、オコゼ）などから主に作神と認識されてきたと推定されている。

なお、山の神は女性の神様で、同性の者には嫉妬するため、女性には祭りに参加できないという伝えがある。

また、研究者の調査により、天草、肥後方面の山の神祭りの影響が濃厚であることが定説となっている。

「実施内容」

参加資格など

主に青年以上の男子で、子どもは見物人として許される。特に世襲などの制約はない。「由来・伝承」の項で述べたように、山神は、同性である女性を嫌うので、女性は祭りに参加しない。また、他地では神社の宮司が祭りを主導する所があるが、唐隈ではそれはない。

祭りの準備としめ縄、供え物など

先ず前日から当日にかけて、祭場以外でも準備できるもの、例

えば料理は家庭で、また注連縄などは集落の集会所で燃られる（写真1）。それから祭場に赴き、聖域全体を囲むためと、神木と見なされる木にしめ縄を張る。その縄は左撚りされたいわゆる左綱であるが、何よりの特徴は紙垂が全く使われていないことで、一見ただの縄と見間違ふほどである。これが極めてこの行事の古風さを感じさせる。

第一の祭り場では、三つの石と鉄製の鉾（長さ一〇センチメートルほど）がご神体として祀られるが、これらと供え物を収めるいわゆる簡易な社殿も準備される。四本の柱に畳半畳ほどの稲藁製の屋根がついた素朴なもので、その屋根を毎年吹き替えるのも準備の一つである（写真2）。

神様への供物は、アマンガ、赤飯、ツト（藁製の包み）に入れたシトギを欠かすことができないが、そのほか焼酎、オコゼ（魚の一種）などが加えられる。これらの供物は、女性は聖域には入れないので、そばまで持ってきて男性が受け取るのである。

第二の祭り場には社殿はないが、神木や神石には注連縄がはられる。



写真1 準備の様子



写真2 社殿

祭りの順序

参加者は第一の場に赴き、三つの石と鉾に向かって手を合わせ、代表のものが祈りの言葉を唱える（写真3）。その言葉については、東上地区には、

今月霜月、清きとうとき日を選び、唐隈区内の山々の神祭りをいたします。前山九殿 中山九郎殿九百九十九大将 後山九郎九百九十 大将今年の新米であまご水ごく うきよめてゆうべ生まれた赤子より今日なくなるまで年寄りまで山に行ってもしけがあらやまちが有った時は清めたまえはらえたまえと申します（原文のまま）児玉善四郎氏 伝承のものを鶴長悟氏記録保存

のような書付が残されている。この章句は区によっていくぶん違いがあるが、それぞれ記録された段階での伝承者が異なるためと思われる。

なお、ご神体からいくぶん離れた前方にわずかの空き地があり、そこに円を描いた土俵をつくり、相撲が行われる。裸のふんどし姿ではなく、服装も履物も祭りにやってきたそのまま、希望者同志が三番勝負で行う。それは山



写真3 神に祈る



写真4 相撲

神への奉納とされる（写真4）。

ついで、第二の場所に移る。やはり祈りの言葉をあげ、最も特徴的なのは、ご神体の前で神様とナンコを行うことである（写真5）。ナンコは鹿児島島の酒席ではよく行われる伝統的な勝負ごとで、手に隠し持った棒（ナンコ玉）の数を当てあうものである。負けた方がその罰として、おちよこに注がれた焼酎を飲まなければならない。

もちろん神様は見えないから、目の前にいるものと仮定して人間側が一方的に神様に話しかけ、勝ち負けを決める。三番勝負で、最終的には神様に勝たせるが決まりである。神様にも焼酎を飲んでもらうまでは飲めないということになる。勝負は延々と続き、罰の焼酎を大量に飲んで酔いつぶれる人がよく出て来ると言う。

こうして、集落に戻って直会（なおりい）神事の後の宴会）が行われ、終了する。

「他地域の同系祭事」

山の神祭りは長島では現在、唐隈以外のほとんどの集落で行われているが、小浜地区、川内地区が本格的に行われていて、よく知られているところである。また、山中の特定祭場であること、しとぎ（米汁）が供物とされること、実施日が旧暦十一月の丑の日か申の日であることなどの共通点もある。



写真5 ナンコ

ただ、祭りの内容には、多くの異同がある。祭りの主たる場が山中の特祭場であること、しとき（米汁）が供え物とされること、実施日が旧暦一月の丑の日か申の日であることが共通点であるが、祭りにかかわること、山中のホコドンと言われる男神に対して宗教的職能者が祝詞をあげるところなどが他と違っている。

県下、近県でも山の神祭りは散在しているが、長島の山の神祭りは、天草、肥後方面の祭りに強く影響しているというのが定説である。

【意義】

樹木、自然石、鉄製鉾などをご神体としており、素朴な精霊信仰の面影が見られる。山の神は供え物などから、作神としての性格が浮かび上がるが、昔は狩猟などの山の仕事と結びついていたことも考えられる。

相撲、ナンコの勝負ごとが行われることは、この祭りの重要な特徴である。競技は、我が国では年占いと結びつけて考えられるが、同地の場合は純粹な山の神への奉納である。

なお、他の多くの集落と同様、出郷者が多く、祭りを担う人の減少に悩んでいる。この祭りの場合、山の神が女性を嫌うという伝承があるため、まだ積極的な参加は難しいが、時間とともに変化が見られるかも知れない。同時に、子どもたちも今は見物するだけだが、いずれ実際的な担い手となることも時間の問題である。素朴さを残した祭りだけに、将来への継承が注目される。

【参考文献】

- ・長島町郷土史編集委員会 一九七四 『長島郷土史』 長島町
- ・下野敏見 二〇一二 『南日本の民俗文化一一 南日本の民
- ・平下英治 二〇一二 『唐隈郷土史 しのはなどんのはなし』

（小川 学夫）

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕南九州市知覧町西元峯苦

〔実施時期〕毎年二月一六日

〔実施場所〕峯苦ウツガン（公民館広場）

〔伝承組織〕峯苦集落

〔名称〕

薩摩藩の農業経営単位で、農村の同族的農家集団である「門」の神をまつる行事。ウツガン祭りと呼ぶ。漢字で書く場合、峯苦では本来「内神」であつたと思われるが、近年は氏神と記される場合もある。

〔実施場所〕

峯苦公民館（峯苦集落センター）の建物の東隣が広場になっており、ウツガンの社殿がある。トコマツリを公民館で行い、その後ウツガンの社殿で神事を行う。

〔実施時期〕

開催日は、一二月一六日に固定されている。午後から注連縄の取り換えなどの準備をし、午後三時頃から公民館での祭事、その後、ウツガン社殿での神事がある。

〔伝承組織〕

集落は全員峯苦姓で、峯苦門のウツガン祭りであるので、集落行事ということなる。祭りには各戸から世帯主が参加する。供え物や料理

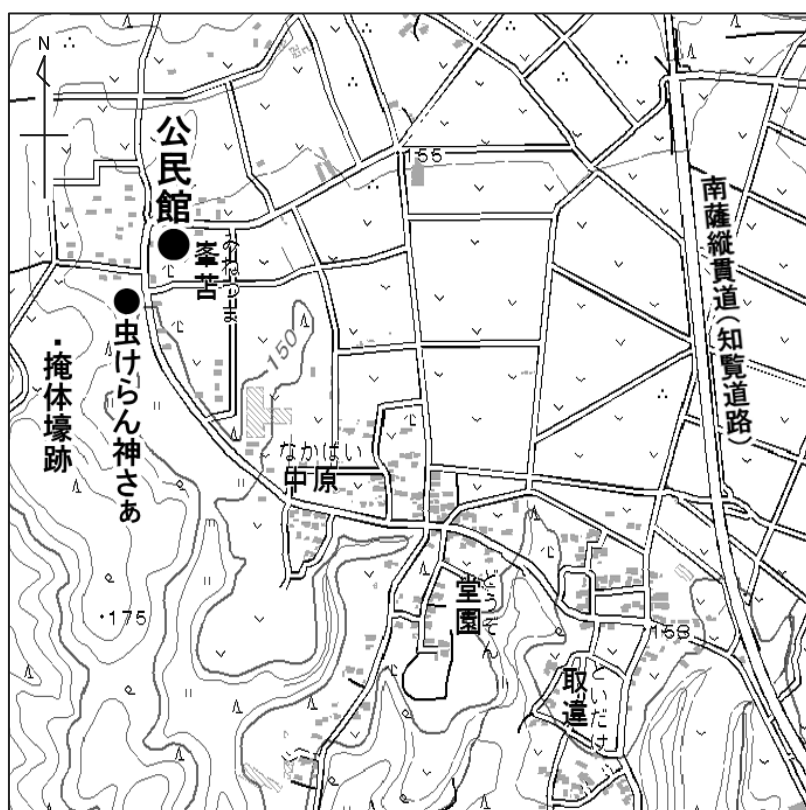


図1 峯苦付近地図（ウツガンは公民館の広場にある）



写真1 峯苦ウツガンの社殿



写真2 宝永5年の棟札（右）

などは持ち回りで行っている。経費の捻出は、集落の共有林を活用してきた。

〔由来伝承〕

峯苔門の内神祭り。下野敏見氏によれば、宝暦六年（一七五六）の「神社差出書」に、「峯苔門 鎮守宝殿一宇（豊玉姫神社末社）」とあり、「トヨタマヒメノミコトという外神を集落内に勧請して祭った内神である。」としている〔下野二〇一一 五〇頁〕。また、宝永五（一七〇八）年戊子十一月七日の棟札が残る。現在の社殿は、昭和六〇年に新築したもの。

〔実施内容〕

1 準備・公民館でのトコマツリ

社殿には二つの木祠が収められている。左側の木祠が高さ一二〇センチメートル、幅八五センチメートル、奥行八〇センチメートルで、右側の木祠は少し大きく、高さ一二五、幅九八、奥行一〇〇センチメートル。小さいほうを女神、大きいほうを男神と呼んだりもする。下野敏見氏によれば、「右の祠は峯苔集落全員で拜んできた神であり、左の祠は門の代表であるオッナ（乙名）家のものである。」とする〔前掲書四八〜四九ページ〕。

午後一時から注連縄づくりが、集落民総出で行われる。社殿に掛ける長さ四・一メートルの長い綱と、二つの木祠に掛ける長さ一・八メートルのものを二本を作る。出来上がると、前年の注連縄は取り外して社殿の東隣にある椎の木の根元に置く。捨てるのは昔からこの木の根元で、朽ち果てた古いものも残る。「今は子の木で、社殿を建て替えるまで、もっと大きいのがあった。」と言う。

午後二時頃、集落の南西にある「虫けらん神さあ」に参拝する。神

柴を取り換え、お神酒を供えて祀る。

虫けらん神さあから戻ると、まもなく豊玉姫神社神主が公民館に到着し、トコマツリの準備が始まる。午後三時前、氏子が公民館の広間にそろい、神主からお祓いを受ける。

2 ウツガン祭り

約一〇分ほどでトコマツリが終わると、公民館東隣のウツガン社殿に移り、社殿とそこにある二つの木祠とに新しい注連縄を張る。二つの木祠のご神体に、白紙で作った衣を着せ替える。左側の木祠が三体、右側の木祠には四体のご神体（石）が祀られている。供え物は、赤飯・シトギを作り、甘酒・米・塩・白菜・魚。

豊玉姫神社神主と集落役員が社殿に上がり、神主が神事を執り行う。女性など他の集落民は、社殿の外から、神事を見守る。

峯苔では、神主が祝詞を上げる際、参拝者どおしで、後ろ髪を引くという風習がある。あるいは、神主も後ろ髪を引っ張られる。神聖な儀礼をわざと壊すいたずらのようにも思われるが、「髪を引くから神を引く意味がある。」とも伝えられている。

下野敏見氏は、「後ろ髪を引くということは、神と語っている太夫どんの力を氏子の身に引きよせいただく意味」としている〔前掲書五〇ページ〕。

社殿での神事が終わると、他の集落民が列を作って参拝し、お神酒をいただき、そのあと直会になる。

〔意義〕

峯苔のウツガン祭りは、旧暦霜月（今は月遅れ）に行われる門の神の祭りの典型的な例と言える（霜月祭り・神祭り）。その中でも、棟札や史料により、近世から続くことがわかる貴重な祭礼である。

小野重朗は、氏神との違いについて、「門の内や、屋敷の内、または家の内に神が入ってきたものを特に内神と呼んだものと思われる。」としている（小野一九八一）。峯苔の場合は、豊玉姫の神を、門の内に招いたものと言えよう。その祭りがウツガン祭りである。

門の豊作、その住民の健康・安全を願ってこのウツガンを祀る。小野は、同じような性格のモイドンと比較し、次のように述べている。「内神は門や家を守る機能を持ち、祖神的な性格をもっているが、同じく門の神のモイドンと比べて、荒々しく崇るとい性格がないのが大きな特徴である。」（前掲書）。

【参考文献】

・小野重朗執筆担当 一九八一 「ウツガン」『鹿児島大百科事典』南日本新聞社）

・下野敏見 二〇一一 「ウツガンサマとは何か」『南日本の民俗文化誌九 南九州の民俗文化誌』 南方新社

（井上 賢一）



写真5 ウツガン祭りで髪を引く氏子



写真3 虫けらん神さあへのお参り



写真6 ウツガン祭りに参拝する人々



写真4 公民館でのトコマツリ

「附記」古屋門のウツガン祭り

峯苦での調査時に、一八日に瀬世の古屋門でもウツガン祭りが行われるとの情報を得たので拝見した。藁製ウツガンの祭り。

○期日 毎年二月一八日 ○場所 南九州市知覧町瀬世古屋門

○ウツガン作り 午前九時に、古屋門の五世帯が集まり、午前中かけて、ウツガンを新しく作り直す。本体となる「カンサマンイエ」、屋根となる「トツ」、祠の「扉」、祠の中でウツガンの台座となる「カンサマンス」を分担して作る。古屋門の構成は弘喜さん（オツナ。扉作り。息子弘文さんはカンサマンス）、和則さん（平成二八年の当番「ヤドマエ」）、秀作さん（扉）、光明さん（息子の太樹さんと扉・注連縄）、五男さん（息子の純次さんと「トツ」作り）。ウツガン全体は、高さ一七〇センチメートル、幅一〇〇センチメートル、奥行八〇センチメートル。扉は縦一三〇センチメートル、横九〇センチメートル。トツは高さ九〇センチメートル。カンサマンスは直径三五センチメートル、厚さ一三センチメートル。

○昼食 ヤドマエの家の床の間に、できあがったカンサマンスを置き、お供え物をし、次の間で昼食をとる（女性は別室）。なます・甘酒・オゴンオメシ・イモンコンコッソニイ（里芋と大根の味噌煮）。

○ウツガン祭り カンサマンイエの古いカンサマンスに入ったご神体（サンゴ石六体）を取り出し、白紙で作った新しい衣に着せ替える。新しいカンサマンスに入れ、前年のカンサマンスの上に置く（二段重ね）。豊玉姫神社神主による祝詞、お祓い、氏子による玉串奉奠と続く。祭りの経費は、瀬世中公民館裏の「カンサマンド」（神様田）の収穫益で賄ってきたが現在は埋め立てた。



写真9 ヤドマエでの昼食



写真7 作り直された藁製ウツガンさあ



写真10 古屋門のウツガン祭り



写真8 ヤドマエに据えられたカンサマンス

隠かくれ念ねん仏ぶつの祭まつり

土真宗系隠れ念仏の祭り

鈴木段講間の親様講

別名

「伝承地」

〔実施時期〕 毎月一六日、春秋の彼岸会、一月一日の御正忌など多数

〔実施場所〕

〔傳承組織〕

「名称」

鈴木段講間の親様講と呼ぶ。

「実施場所」

鈴木段講間の親様（仏壇）を預かっている宿。毎年一月と一〇月の二回、宿が移る。

「実施時期」

毎月一六日のおつとめ。一月四日の御文章おこし。一月一日の御正忌。春秋の彼岸会など多数。

「傳承組織」

コヅヤク（講頭役）二人、ツドイ（集）五人。コヅヤクは五つの講間から選ばれた五人を皆が投票で決める。但し、鈴木段の公民会長や婦人会長は除く。



阿久根市大川鈴木段周辺



コヅヤク（講頭役）の読経

〔由来・伝承〕

鈴木段講間には、本願寺第一八代「文如上人（一七四四～一七九四）」と花押・方便法身尊形」の銘がある阿弥陀如来像の掛け軸が二幅ある。

それを「身代わり阿弥陀如来様」と呼んでいるので、どちらかが偽物である可能性がある。しかし、二幅とも本物ではないかと言う説もある。隠れ念仏取り締まりの役人が来た時は、偽物の阿弥陀如来を渡す。文如上人の銘があることから、少なくとも延享年間（一七四四～四八）の頃から隠れ念仏の歴史を持っていることが推測される。

〔実施内容〕

毎月一六日のおつとめでは、午前六時半から二時間程度の講が開かれる。コジヤク二人が親様（仏壇）の前で正信偈を読むと、講員も一緒に称える。最後にコジヤクの一人が領解文^{りょうげもん}を講員の方を向いて唱えて終わる。それから朝の食事に入り、懇談をして解散する。（證海寺住職 橋本美由紀「かくれ念仏現地調査報告書」二〇一二年 も参考にした。）

講宿になった家は、集落に死人が出た場合、コジヤク二人がかけつけに来るので、昔は夜を徹して番をしなければならなかった。

現在は、午前七時から午後七時まで家に居て死人が出た場合の準備をしている。それ以外は受け付けないという。講宿になった家の負担を軽くするように考慮されている。

〔意義〕

皆で集まり、経文を唱え、阿弥陀如来の救いを求める。その後、食事に入るが皆、楽しそうに懇談をする。高齢者が多い集落であるが、皆、楽しそうに生活をしている。集落のまともにも良いという。講員の中には魚の干物工場を営む人がある。経営者も従業員も信仰心の深さをもとに勤勉で、それが地域起こしにもつながっている。

また、この集落には大工講を催す人々がいるが聖徳太子の掛け軸を飾って祭りをする。浄土真宗の影響が強い。

（2）^{くきの ぶつばんこう} 柗野仏飯講

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕薩摩郡さつま町柗野

〔実施時期〕年始法要、年始会、御正忌、明如忌、彼岸会、盂蘭盆会など

〔実施場所〕柗野公民館

〔伝承組織〕仏飯講 「コウガシラ（講頭

一人、会計一人、番役四人、講間係四人、最勝講係四人

〔名称〕

柗野仏飯講と呼ぶ。

〔実施時期〕

年始法要、年始会、御正忌、明如忌、彼岸会、盂蘭盆会などで実施する。

〔実施場所〕

柗野公民館で行う。

〔伝承組織〕

仏飯講として「コウガシラ（講頭）一人、会計一人、番役四人、講間係四人、最勝講係四人」で構成される。

「由来・伝承」

弘化三（一八四六）年四月八日に京都の浄土真宗西本願寺直属の講として設立認可されたことが「終野仏飯講 歴代講頭芳名 弘化三年四月八日」という公民館の張り紙から分かる。初代講頭は玉利源之助で、五代までが玉利姓のついた講頭である。終野に浄土真宗を伝えた慈心房実道法師（岩城実道）は熊本県水俣方面から終野方面に来て住みついた人である。墓は、終野大丸の墓地にある。墓碑には「葦北郡田之浦正善寺之生 明治四十年二月三日入寂 八四才」と記されている。嘉永三（一八五〇）年に庵を開設し、明治十一年八月に信教寺が開設された。これまで講頭を中心として催されてきた浄土真宗系隠れ念仏である。講頭に合わせて講員たちも共に念仏を唱える（『宮之城郷土史』二〇〇〇年）。

残されている御消息「壬申春正月 龍谷寺務明如」からのものがある。ここに記された「壬申」は明治五年である。鹿児島県は厳しい浄土真宗の禁制がしかれている時代である。又、終野公民館には、直径五〇センチメートルぐらい、長さ三メートル位の「禁制時代の仏典収納木 終野仏飯講」と記された雑木の丸太が展示されている。その雑木は縦引きの鋸で切られ、中が空洞になっており、仏典や「南無阿弥陀仏」の名号や絵像が納められるようになっていた。禁制時代は、近くの森に隠されていた。役人が来ても、ただの丸太だとして、取り締まりの難を逃れたと言う。

「実施内容」

例えば、年始会は正月元旦から三日まで、朝・昼・晩の三回に分けて行われる。講頭を中心として、皆で正信偈や仏説阿弥陀経が称えられる。彼岸会も三日間行われ同じような経文が唱えられる。盂蘭盆会には信教寺から僧侶が来て、経文を唱えた後、説教がある。

「意義」

終野仏飯講では、伝統ある隠れ念仏の歴史を、例えば、彼岸会などに彼岸花祭りを盛大に催し、また、小学生たちに仏飯講の歴史・伝統を説明をしたり、終野小学校の児童たちが地域の田の神像の紹介をしたりして、良き後継者の育成に精出している。また、仏飯講の催しがあるときは、新聞やテレビなどで宣伝をし、他の地域からの講や祭りへの参加を奨励している。このように伝統的な仏教行事を観光民俗として生かし、地域起こしを勢力的に行うという意義ある活動が行われている。仏教民俗学的に注目される南九州独特の祭りである。

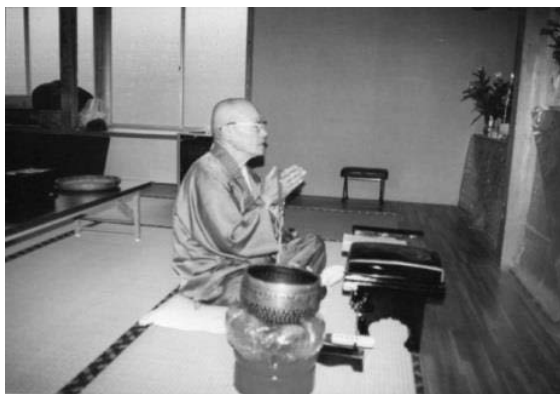


写真1 年始法要で經典を読む講頭



写真2 講頭と共に読経する信者達たち

2 習合宗教系隠れ念仏の祭り ダンナドン信仰

〔別 名〕 ダンナドン、「ウチデラ（内寺）」

〔伝承地〕 いちき串木野市荒川・羽島

〔実施時期〕 死人が出た時。春・秋の祈禱

〔実施場所〕 荒川・羽島のダンナドン（テラ）

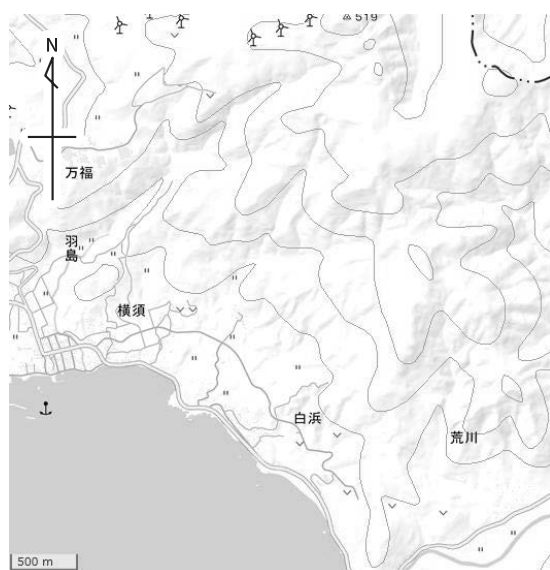
〔伝承組織〕 ダンナドンに所属する「トイナモン（年の者）」の集団

〔名称〕

ダンナドンというのは、檀那寺のことで、集落の人々の「隠れ」菩提寺としての性格を持ち、「隠れガン（神）」とも呼ばれている。主にいちき串木野市羽島や荒川の海岸沿いの集落で「ダンナドン」と呼ばれ、荒川の内陸部や羽島の土川では「テラ（寺）」または「ウチデラ（内寺）」と呼称される。いずれにしても菩提寺としての性格を帯びていることが共通する。それに、「ダンナドン」はまた、菩提寺の御神体である「オヤサマ（御祖母様）」を差すこともある。「ダンナドン信仰」は、死人が出た直後の駆けつけや、それに伴う死体を柔軟にする呪術を中心とした葬送儀礼の中で繰り広げられる。死霊の鎮魂・滅罪機能の強い「隠れた」民俗宗教である。

〔由来・伝承〕

二つの説がある。一つは、明治二年の廃仏毀釈以後、初代の「ダンナドン信仰」の布教者が、隣接する薩摩川内市青山町の高貫集落から「ウナツテゴ（鰻手籠）」に仏像や仏具を入れて荒川に持ち込んだと言うものである。二つ目は「ダンナドン信仰」の経文と類似している宮崎県都城地域の「カヤカベ類似の宗教（ノノサン）」が伝播してきたのではないかと言ったことが考えられる。荒川の城之園家の「ダンナドン」には御神体として阿弥陀如来三尊像の懸け仏があるが「寛永一九（一六四三）年」の銘がある。そうすると藩政時代はかなり古い



いちき串木野市羽島・荒川周辺



「ダンナドン」の「トイナモン」による春祈禱

頃から信仰されていたのではないかと言うことが考えられる。したがって第二の説が適切かと思われる。

【実施内容】

松崎家「ダンナドン」の例を採り上げる。

松崎家の「ダンナドン」では、旧暦一月の五日か六日の日の良い日に「トイナモン」が春祈禱を行い、厄払いの経文を上げる。この日は、厄年の人がいる家から、「ダンナドン」に直径四センチメートル六センチメートルの丸餅に、二〇センチメートルぐらいの丸餅と、八つに切った三角餅をムスタ（長方形の箱）に入れて持参してくる。別に御賽銭を入れた半紙を捻って添える。その餅を「トイナモン」が「オヤサマ」に供え、また「ゴブツショ（御仏餉）」や豆腐・大根や蒟蒻の入った煮染と小豆の煮物・丸ぼうるなどのお菓子なども上げる。参詣人は、松崎家の家族、松崎家のある河原集落の厄年祓いや健康祈願を依頼した人々である。春祈禱の順序は、だいたい次のとおりである。

- 1 「線香立て」の経文を読む。そして、その年の厄年の人の名前と年齢と、それぞれが「マエヤク（前厄）」か「ホンヤク（本厄）」かを読み上げていき、「リン（鈴）」を三回鳴らす。
- 2 「オサンセンアゲ（御賽銭上げ）」「ゴシユアゲ（御酒上げ）」、「オブツショアゲ（御仏餉上げ）」の経文を唱えて、リンを三回鳴らす。
- 3 「ヤクバライ（厄祓い）」の経文を唱える。
- 4 また、厄年の人の名前と年齢と、それぞれが「マエヤク」か「ホンヤク」かの続きを読み上げる。
- 5 「オサンセンアゲ」、「ゴシユアゲ」の経文を唱えて、リンを三回鳴らす。
- 6 「オサンセンアゲ」、「オマエモン（御前物）」の経文を唱えて、リンを三回鳴らす。「オマエモン」の経文は、神仏の前にお供えをしましたというものである。

7 「シホウモン（四方門）」の経文を唱えてリンを三回鳴らし、蠟燭と線香を替えるように松崎家の家族に指示する。四方門の経文は、四方の諸神仏に厄を祓ってもらうためのものである。

8 引き続き、他の厄年の人について四と同じようなことをする。

9 「家内安全を申し上げます。」と言って、松崎家がある河原集落や周辺の集落の家族から依頼された人の名前と年齢を読み上げる。その中には、故郷を遠く離れて暮らしている人の名前や、大相撲の関取になって活躍している人の名前があったりする。

10 「オサンセンアゲ」、「チャマツリ（茶祭り）」、「センコウアゲ（線香上げ）」、「ゴシユアゲ（御酒上げ）」の経文を上げる。

11 最後に「トイナモン」が、「今年の無事、健康をお願いします。有り難うございます、有り難うございます、有り難うございます。ナンマンダブツ（南無阿弥陀仏）、ナンマンダブツ、ナンマンダブツ。」と唱え、リンを三回鳴らす。

「ダンナドン」に供えた「ゴブツショ」は、参列した人々で分け合って食べる。それを食べると「お手盛りになる（自分の利益になり、無病息災を得ることが出来る）」と言われ、皆、喜んで食べ合った。他に松崎家で準備した煮染めや膾・握り飯などを、皆で談笑しながら和気あいあいとした雰囲気です。お互いに今年の健康と無事を祈りながらいただく。その後、供えられた餅を下げ、幾つかを松崎家で貰い、残りは返す。餅を持ち帰った門徒たちは、親戚や知人に丸餅一〇個と三角餅一個ずつを配る。

そして、厄を迎える人は二月三日の節分の日に、一〇円なり一〇〇円なりの硬貨を、自分の厄年の数だけ紙に包んで夜、集落の「タノカンサー（田の神様）」が祀られている三叉路の所で撒いた。拾ったお金をその夜は自分の家の中に持ち込んではいけなさとされ、石垣などに隠しておいて翌日使った。

春祈禱は、他の「ダンナドン」でも松崎家と同様のことを行っている。しか

し、松崎家の「ダンナドン」は、節分行事を盛んに行っている羽島の悟入寺や野元の良福寺が、かなり距離的に離れた位置にある。そのため、禪寺の節分行事に春祈禱が吸収されてこなかったのである。

【意義】

「ダンナドン」では、色々な祭りがあるが、ここでは、松崎家の春祈禱を取り上げた。春祈禱や厄年除けの行事は、近くの寺や神社で盛んに行われているが、「ダンナドン」の「トイナモン」の呪術力と「ダンナドン」という隠れ神に頼った方が、効き目があり、経済的でもある。また松崎家の「ダンナドン」に所属している人々の心の支えにもなり、親睦の役割を果たす。この松崎家の「ダンナドン」の行事は、「トイナモン」の亡き後、松崎家の嫁が経文を唱え続けている。しかし、「風立て」などの呪術は、同じ羽島にある悟入寺の僧侶が引き継いでいる。悟入寺は、このような民間の「ダンナドン」信仰を受け入れ、消え失せようとしている民間信仰を吸収して禅宗の普及を図っている。

(森田 清美)